

# お茶うけ 第71話

## 指で触れるあそび

子どもたちは、「くすぐり」遊びが好きです。赤ちゃんの頃から、親たちにお腹や背中をくすぐられると、キャッ、キャッと笑って喜びます。育児書では、くすぐりを「スキンシップ遊び」と紹介して、親たちが子どもの肌に触れて愛情を伝える大切な遊びの一つと説明しています。ちなみに、「スキンシップ(skinship)」は和製英語で、くすぐりなど皮膚接触という意味の英語は「タッチング(touching)」です。また、タッチングには「人を感動させる」という意味があります。「くすぐり」は、子供の「肌に触れ」て「感動を与える」ものようです。

私の子どもの頃の「くすぐり」遊びの一つに、「尺取り虫」がありました。手の親指と人指し指の2本の指を広げ、ほかの指は握ります。2本の指を、机など歩かせる平面に乗せると、尺取り虫が静止した形になります。人指し指は止めたまま、親指をゆっくり人指し指に触れるまで前に進めます。次に、親指を起点にして、人指し指を前に伸ばして平面上に下ろします。そしてまた、親指をゆっくり人指し指に触れるまで前に進めます。この遊びは、人指し指と親指が閉じたり開いたりしながら進む姿が、尺取り虫の動きに似ているので、「尺取り虫」の名づけられました。

子どもの腕の手首に近いところに、この「尺取り虫」を乗せてリズムをとりながら、ゆっくりゆっくり肩に向かって前進させ、指を肩まで登らせます。指が肩にたどりついた、次の瞬間に子どもの背中や脇の下をくすぐるのです。

今の子どもたちは、多分尺取り虫を見たことがないと思われますが、名前はともかく、子どもは、腕に沿って指の「尺取り虫」が這い登ってくるのが気味悪くても、その後のくすぐられる楽しみを期待して我慢しています。

また、子供たちはおもちゃの自動車などを彼らに向かって動かすと喜びますので、離れたところから子どもたちに近づいていく「くすぐり」遊びを紹介します。

今からもう35年も前になりますが、会社が購入した機械の説明役として来日したフランス人のP氏と、約1ヵ月間一緒に仕事をしたことがあります。日本は初めてというP氏を、わが家に招待したときのことです。P氏は日本の家屋の建て方や畳敷きの部屋を珍しそうに眺めていましたが、やがて落ちてくると2歳の私の息子を「あやし」始めました。

息子が座って投げ出した足に向かって、太くて大きなP氏の手がもぞもぞと進んでいきます。見ると、手の親指で中指と小指を内側に握って、残った人指し指と薬指の2本を交互に動かして前進しています。それは、ヤドカリが海の底を這いずる姿に似ていました。息子は近寄ってくる指を不安げに見ていましたが、P氏の指が脛を這い上がって、息子のももをくすぐりだすと、身をよじって嬉しそうに笑いだしました。この遊びを何度も繰り返すうちに、P氏の手が息子の足に向かって動きだすだけで笑いだすほど、息子のお気に入りの遊びになりました。私は、これを「ヤドカリ」遊びと名づけました。

P氏は息子を「私の甥(my nephew)」と呼んで可愛がり、フランスに帰国してからも、毎年のクリスマスカードに、「my nephew は元気ですか?」と書いてきます。今、私は孫にP氏直伝の「ヤドカリ」遊びをして喜ばせています。

一般に、乳児や幼児を育てるのに、肌で触れ合う「スキンシップ」が大切であると言われます。『伝承 顔・指・手・足・体・あそび集』の本には、「しゃくとりむし」の遊び(78~79ページ)のほかにも、私が子どものときに遊んだ「はちがさした」、「かくれんぼゆびさがせ」、「おふろやさん」など、懐かしい遊びがありました。しかし、私が書店や図書館で、育児書や保育書の「スキンシップ」遊びを見た限りでは、保育園の遊戯用と思われる遊びが多く、母親と子どもが互いに「指で触れ合う」遊びが少ないように思いました。母親と子どもが肌を触れ合って楽しめる、より多くの「スキンシップ」遊びや、「くすぐり遊び」を紹介して欲しいものです。なお、フランス人のP氏に教わった「ヤドカリ」遊びは見つかりませんでした。「くすぐり」遊びにも、お国柄があるのでしょうか。

以上

参考文献:

『伝承 顔・指・手・足・体・あそび集』  
芸術教育研究所・おもちゃ美術館編 黎明書報刊